

エントリー名：新潟市立白新中学校
学校名：新潟市立白新中学校
活動名：教師は生徒の学びのロールモデル！教師の個別最適で協働的な校内研修の挑戦
<p>解決すべき課題</p> <p>当校は、子供の資質・能力を育む上で何より日常の授業が重要であると考え、「授業づくりを核にした校内研修」に力を入れて取り組んでいる。これまでの校内研修（活動前）では、子供の姿から共通の研修テーマを設定し、研修内容や方法を共有しながら組織的に取り組んできた。しかしながら、教師一人一人の学びに着目してみると「研修における受け身の姿」「自己の学びたいことと校内研修の内容にずれを感じている姿」「自己の実践の有用性や貢献感を感じられていない姿」があった。これらの教師の姿から、本校における校内研修の課題を次のように捉えた。</p> <p>①校内研修が画一的で、教師の学びが受け身になっていること。 ②教師一人一人の内発的な研修ニーズをもとにした授業実践になっていないこと。 ③教師一人一人の教育実践と学校教育目標のつながりを感じることができていないこと。</p>
<p>目標（教師の個別最適で協働的な校内研修の目標）</p> <p>教師一人一人の内発的な研修ニーズをもとに、多様な研修スタイルで力量形成を図る「個別最適で協働的な校内研修」を通して、「主体的に学ぶ教師の姿（ロールモデルの姿）」を実現する。</p>
<p>方針（教師の個別最適で協働的な校内研修の方針）</p> <p>①教師と生徒の学び方を相似形にする仕組み（ロールモデルの意識）を講じる。 ②教師の内発的な研修ニーズをもとにした、多様な研修スタイルを重視する。（個別最適な学び・協働的な学び） ③教師の主体的・対話的で深い学びを実現する。（教師の学習サイクル） ④教師の内発的な授業実践と学校教育ビジョンを関連づける。（実践の有用性・貢献感）</p>
<p>活動内容</p> <p>生徒の資質・能力を育成する手立てとして、学校教育ビジョンに「(ア)興味を持つ」「(イ)課題を設定する」「(ウ)実行する」「(エ)振り返る」の4つの学びのプロセスを設定した。この4つの学びのプロセスを教師と生徒の相似形の学び方（図1）（方針①）として、授業づくりを核とした個別最適で協働的な校内研修を構想・実施した。</p>
<p>取組の過程</p> <p>教師の個別最適で協働的な校内研修を実現するためには、「教師は生徒の学びのロールモデル」という教師の研修意識への転換が重要だと考えた。4月に校内研修を実施し、「教師の主体的に学ぶ姿が子供たちへの学びへとつながっていくこと」「日常の授業が大切であること」を共有し、「授業づくりを核とした個別最適で協働的な校内研修（図1）」の考え方を共有した。 <授業づくりを核とした教師の個別最適で協働的な校内研修の概要></p> <p>(ア) 自分の授業に興味を持つ</p> <p>教師一人一人の内発的な研修ニーズをもとにした授業実践にするために、各教師が「目指したい授業」「授業課題」「学びたいこと」について事前に整理してきた上で、小グループをつくり互いに紹介し合う校内研修を行った（方針②）。次に、学校教育ビジョンの5つの重点（目的の共有、対話、ファシリテーション、地域連携、UDL）から自己の授業課題や学びたいことを踏まえて一つ選択し、選択した重点をもとに研修グループを組織した。（方針④）</p>



図1 教師との生徒の相似形の学び方

<p>(イ) 自分の授業の課題を設定する。</p> <p>授業カルーブリックや研修グループで互いに授業を見せ合う活動、意見交流を通して自己の授業課題を明確にした。（方針②③）</p> <p>(ウ) 授業を実行する</p> <p>校内研修を日常の授業に直結させ、「教師の主体的・対話的で深い学び」を実現していくために、個別最適な授業実践の中に協働的な学びを入れ込む必要があると考えた。</p>
<p><教師の主体的・対話的で深い学びを促す学習サイクル></p> <p>A 日常の授業実践の中で、「スキル・能力」を高める。 B 協働的な学びを通して、「気付き」が生まれる。 C 実践を振り返り、授業の見方・考え方を深め、次の実践への「態度・行動」が生まれる。（図2）（方針③）</p>
<p>図2 教師の学習サイクル</p>
<p>図1のプロセスの中で、図2のサイクルが機能するように、次の3つの手立てを講じた。</p> <p>○手立て1 研修グループによる探究的な校内研修の実施</p> <p>各グループが研修テーマ（重点）をもとに、探究的に研修を進めていけるようにするために、研修計画（図3）を作成した。5つのグループがそれぞれの学びやすい内容・方法を選択し、意欲的に実践する姿が見られた。</p>
<p>図3 UDL グループの研修計画</p>
<p>○手立て2 研修グループによるミニ研修・講座の実施（アウトプット&インプットの充実）</p> <p>各研修グループの学びをミニ研修・講座でアウトプットする校内研修を実施した（図4）。グループ内でミニ研修・講座の構想・実施する協働的な活動を通して、実践を整理したり、新たな課題を見出したりすることをねらいとした。また、他のグループにとってはインプットの場となり、5つの重点の理解やつながりを相互に深めながら研修する姿が見られた。</p>
<p>図4 ミニ研修・講座</p>
<p>○手だて3 ICTによる研修情報の発信・共有</p> <p>Google classroom を活用して校内研修における情報を一元化することで、いつでも必要な情報にアクセスできるようにした。具体的には、「校内研修の連絡」「研修動画」「研修の資料」「指導案・授業動画」「研修グループからの発信」「ミニ研修・講座、授業者へのフィードバック」などを発信することで、互いに研修情報から学ぶことができる環境を整えた。</p>
<p>(エ)「自分の授業を振り返る」（方針③）</p> <p>教師一人一人の授業実践を振り返る成果発表会を実施した。目的は「自己の授業実践の学びを整理すること」と「自己の学び方を振り返ること」である。個別最適で協働的な学びを通して、教師一人一人が自分にとっての最適な学び方を学ぶことが重要であると考えた。</p>
<p>活動の成果</p> <p>受け身の姿から、自分たちで研修を創りだしていく姿に変わったことが大きな成果である。「〇〇の研修をやりたい」「〇〇先生の授業を見に行こう」「〇〇に挑戦したい」「〇〇の研修に参加したい」等、主体的かつ自律的に学ぶ姿が多く見られている。また、各グループ間の学びに興味をもち、自己の研修に取り入れながら学びを広げ、深める姿が見られている。活動前と活動後の校内研修の効果を検証するために、自主・向上性（教師個々の学び続ける意欲と行動の高さ）と同僚・協働性（学校全体の教育活動に対して組織的に取り組む同僚・協働性の高さ）の2つの尺度から構成される教員所属意識尺度（河村・武藤・藤原、2014）を5月と11月に測定し、t検定を用いて検討した。その結果、自主・向上性と同僚・協働性の両者において有意差が見られた。</p>